

非 口 鳥

# 悲鳴

菊池亮太

## 登場人物

山下	男	園長
田中	女	社員
木村	男	バイト
佐藤	女	新人

劇中の『ワーニヤ伯父さん』のテキストは神西清翻訳の書籍を使用

そこはどこか田舎にある介護施設のスタッフルーム

舞台は巨大な机の上の、殺風景な瓦礫の山

その机の上の中心に城を彷彿させる形で普通の机が重なる

あたりには子供の玩具が静かに散乱している

机の上には、電話機、本、ルービックキューブ、ネームカード、置き鏡、ラムネ、粒チョコ、  
たけのこの里、なんだかわからないパイプ、など

これから巨大な机の上で、大きな子供たちが自分たちの机を囲む

それらが乗っている巨大な机の周りをさらに客席が囲む

本作品の著作権は、作者である菊池亮太に帰属しています。上演や公開、転載をご希望される場合は有償無償に関わらず、必ず一か月前までに作者、又は作者所属劇団までお問い合わせ下さい。

上演希望の際は、確認次第、台本データを編集可能な形式でお送り致します。

上演に際しまして、演出や脚本の改編は問いません。

《上演料金の例 劇場席数×公演回数×チケット前売り料金(単位:円)×5%》

尚、上演料金が無償の場合は、チケット前売り料金に0を代入します。

印刷された台本の落丁、汚れ、誤字等による交換等は致しかねます。ご了承下さい。  
不都合のある場合はメール、又は劇団HPよりお問い合わせ頂ければ、確認次第、改訂版のデータをお送りさせて頂きます。

その他、ご不明な点やご質問等のお問い合わせは下記アドレスまでお寄せ下さい。

劇団 身体言語 Body Language Artists Company  
メールアドレス kikuchimethod@outlook.jp

木村、登場して前説を始める  
終わると山下、登場  
ワーニヤ伯父さんの本を読み始める  
木村、それを見ている

山下

いいや、欲しくない  
この春の初め、伝染病のはやってる、なんとかいう村へ行ったことがあったつけが  
……発疹チフスというやつでね  
……百姓家は、軒なみに、病人がごろごろしているんだ  
……いやその不潔なこと、臭いこと、煙たいこと  
ゆかべたには仔牛が、病人と同居しているし……仔豚までそのへんを、うろろろしている始末なのさ  
……そこでまる一日、あくせく働いて、ちよいと一服するまもないし、これっぽちの物を、口へ入れる暇もなかった  
やつとこさで、家へ帰ってみると、やっぱり休ましちやもらえない  
鉄道から、線路工夫を一人かつぎこんで来てね、手術をしてやろうと、そいつを台の上へ寝かしたら、やつこさん、クロロホルムにかかったなり、ころりと死んじまったじゃないかと  
ところが、よけいな時に人間らしい感情が、ここんところ目で目をさましてね、まるでその男を、わざと殺してもしたみたいに、気が咎めるんだ  
……そこで私は坐りこんで、こう目をつぶってこんなことを考えたよ  
百年、二百年あとから、この世に生れてくる人たちは、今こうして、せつせと開拓者の仕事を  
しているわれわれのことを、ありがたいと思ってくれるだろうか、とね  
ねえ、ばあやさん  
そんなこと、思っちゃくれまいねえ  
たとえ人間は忘れても、神さまは覚えていてくださいますよ  
ああそうか、ありがとうよ  
いいことを言ってくれたね

木村、ひどい寝癖で舞台の中へ

木村 おはようございます  
山下 あ、おはよう、え、いたの？  
木村 あ、はい  
山下 夜勤明けか  
木村 あ、はい  
山下 それ  
木村 あ？  
山下 頭  
木村 はい？  
山下 鏡、見てきた方がいいよ  
木村 ああ、そうですか？  
山下 うん  
木村 あ、本ですか？  
山下 そうそう、木村君の？ これ  
木村 はい  
山下 そうなの（差し出す）  
木村 あ、お貸ししますよ  
山下 あー、ありがとう、でも、もう読み終わったから  
木村 そうですか……どうでした？  
（渡して）なんか、出てくるの、おじいちゃんおばあちゃんばかりだね

木村 あ、ええ、まあ  
山下 なんかもつとこう、ないの？ 夢とか  
木村 夢っていうか、リアリズムっていうか  
山下 ほー、リアリズム  
木村 あの、演劇にも、お芝居にもいくつかジャンルがあつて、ジャンルというか、段階があつて  
山下 へえ  
木村 それで、このリアリズム、つてジャンルのお話は、山下さんが想像してるみたいな普通の話  
みたいに、起承転結とかの物語があるわけじゃなくて、いや、物語はあるんですけど、もつ  
と、こう、現実みたいに、現代人の生活みたいな、お話しにしよう、っていう  
山下 あー、じゃあ、リアルにはないんだ、夢  
木村 いや、ない、わけ、じゃ、ない、ですけど  
山下 いっそ、おじいちゃんおばあちゃん使ったらいいじゃん、ここの  
木村 いや、  
山下 だつて、リアリズムでしょ  
木村 でも、あの、アルツハイマーの人とかいますし、  
山下 ああー  
木村 そうそう  
山下 というか、現代人つて、もうこれ大昔の話でしょ  
木村 まあ、そうですけど  
山下 何年前  
木村 百年ちよつとですかね  
山下 でしょ  
木村 はい  
山下 んー  
木村 どうでした？  
山下 ん？ どうつて？  
木村 いや、これ読んで、  
山下 んー、どうー、つて、  
木村 あー、ですよー  
山下 ピンとは来ないよね  
木村 ですよ  
山下 よくわかんないんだけど、好きなの？ こういうの、木村君  
木村 好きっていうか、まあ  
山下 え、え、好きで読んでるんじゃないの？  
木村 好きー、でもないですけど  
山下 じゃあ、なんで読んでるの？  
木村 いや、勉強というか  
山下 へー、勉強になるの、というか、そういうのつて、どうやって勉強するの？  
木村 それは、本読んだり、舞台観たり  
山下 じゃあ、目が見えない人はどうするの？  
木村 それは、わかんないですけど  
山下 んー、じゃあ、木村君は、これ読んで、どんな事、勉強したの？  
木村 あー、そうーです、ねー（ページをめくりながら）あ、そう、来春つて言うじゃないですか？  
山下 うん  
木村 春は来るもんなんだな、つて向こうから  
山下 はあ  
木村 勝手に  
山下 うん？  
木村 ほら、青春とか、勝手に来て、勝手にどこか行くじゃないですか  
山下 あー

木村 木村で、夏なんですけど、夏は思い出すものだと思うんですよ、過ぎしあの夏の日  
山下 はあ  
木村 あの夏の思い出とか  
山下 へえ  
木村 あ、夏休みとかまさにそうだったじゃないですか、過ぎてから実感しません、夏って  
山下 あー、はいはい、たしかにね  
木村 で、冬ですけど、冬は越すものだと思うんですよ、冬を越す、年を越す  
山下 ふんふん  
木村 で、で、秋は、どうなるんだろうと思って、秋、って、なんて言うんでしょうね  
山下 はあー  
木村 ね  
山下 秋かー・・・あれ？ この本、そんなこと書いてあった？  
木村 直接は書いてないんですけど・・・この、話が、四つに分かれてたでしょ、一幕、二幕、三  
木村 幕、四幕、って  
山下 うん  
木村 で、その場によつて、季節とか、時間帯が違って、その、話の内容に、ふさわしい風景にな  
山下 ってるんですよ  
木村 へー  
木村 で、そういう、書いてないことから、想像していつて、より豊かな表現を追求するのが、リ  
木村 アリズムなんです  
山下 なるほどねー  
木村 なんかも、書いてあることだけで読んでも、あんまり、こう、パツとしないでしょ  
山下 だから、こういう、書いてない周りのこと読み取って、想像していくんです  
木村 はー  
木村 で、そういうことを考えながら読んでたら、ちよつと思つたんです、秋ってなんて言うんだ  
山下 ろうって  
木村 へー  
木村 ・・・・あれ、田中さん、遅くないですか？  
山下 え？ あ、そう？  
木村 もうすぐ、9時ですよ  
木村 ああ、そうね  
木村 めずらしいですね、あ、なんか言ってますでしたっけ？  
山下 昨日？ あー、言ってたね、遅刻するかもって、なんか  
木村 なんてでしたっけ？  
山下 なんてだっけ？  
木村 ・・・・  
木村 ・・・・  
木村 山下さんは、どんな事、思つたんですか、これ読んで  
山下 え、これ読んで？ んー、まあ、こういうものなのかなー、って  
木村 ・・・・あ、ほら、さつき、読んでたじゃないですか  
山下 あー、うん  
木村 なんかも、よかつたというか、気に入つたんじゃないんですか  
山下 いや、なんか、ちよつと、ここだけいいなー、って思つて  
木村 え、一番、最初ですか？  
山下 うん  
木村 最後じゃなくて？  
山下 うーん、やっぱり、最初かなー  
木村 そうですかー？  
山下 まあ、なんとなく、ね、だつて、後になるほど、ややこしくなつて、誰が誰だかわかんなく  
なるもん

木村 じゃあ、逆に、こう、なんで最初のところを読んでみようと思ったんですか？

電話が鳴る

木村 田中さんですかね  
山下 かなー・・・(出る) はい、お電話ありがとうございます

はいー、お疲れさま、はいはい、あー、そうー、やっぱり、うんー、はいはいー、わかった、うん、気を付けてねー、はいー、おつかれさまー

電話、終わる

木村 田中さんですか

山下 うん

木村 なんて、(言っていました?)?

山下 ああ、もうすぐ着きますって

木村 そうですか

山下 うん

木村 なにかあったんですか？

山下 あー、おうちでね、揉めてるんだってー

木村 あ・・・はー

山下 離婚だってー

木村 え、あ、ああ？

山下 離婚、するんだって

木村 ええ、もうですか？

山下 ねー

木村 あれ？ え、あれ？ 春先に結婚しましたよね、まだ夏も終わってませんけど

山下 終わってないね

木村 えー

山下 最近、多いみたいよ、そういうの

木村 ええー

山下 例年どんどん、こう、その周期が短縮していつてるらしくて、3か月くらいが多いんだって  
木村 ええー、どうしてでしょうね

山下 さー

木村 はー

山下 逆に、何十年もあれしといて、突然別れる、っていうのも、わりと多いみたいだよ

木村 あー

山下 あー、どうする？ 朝の仕事、替わる？ 替わる？

木村 あ、その方がいいですかね

山下 もう着くらしいけど、田中さんも、待つ？

木村 あー、じゃあ、そうします

山下 大丈夫そう？

木村 あ、はい、たぶん

山下 じゃ、よろしく

木村 はい・・・田中さん、どんな感じでした？

山下 あ、でもピンピンしてたよ

木村 ピンピンしてたんですか

山下 うん、ピンピンしてた

木村 そうですか

山下 若いからね、まだまだ

田中 おー疲れ様です  
山下 おつかれー  
木村 ええ、早いっ  
田中 おつかれー  
木村 お疲れ様です  
田中 すみません、ぎりぎりになって  
山下 いーよ、いーよ  
木村 こんなにすぐ着くなら、電話する必要あったんですか  
田中 一分でも、遅刻は遅刻、ちよつとでも送れるなら連絡、え、木村君、鏡見た？  
木村 え、そんなにですか？  
田中 朝、鏡も見ないから、彼女もできないんじゃないの？ 夜勤明けだとしてもー  
木村 はー、関係ありますかねー  
田中 関係ないと思ってるから、彼女ができないんじゃないの？  
山下 こういうタイプも需要あるから、きつと、世界のどこかで  
田中 まあ、付き合うなら、気をつけた方がいいよ、同棲してみると、やっぱり違った、って、い  
うの、あるから、私が言うんだから、間違いないよ  
山下 あー  
木村 えー  
田中 え、付き合ったことある？ 人と  
木村 そーりーやあ、ありますよ  
田中 今、彼女いる？  
木村 いーまーは、いないですけど、  
田中 、今いない人はね、ずーと、いないんだよ  
木村 だって出会いがないですもん  
田中 はい、出た！ 出会いがない！  
山下 出会いがないっていうのは、出会いを活かせない人が言う台詞ですよ  
田中 あはは  
木村 でも、でも出会いがないのも事実でしょ  
山下 出会いねー  
田中 というか、さ、なんで夜勤中に寝癖が出来るの？  
木村 居眠りしたんです  
田中 どんな体制で居眠りしたらそんな頭になるの？  
木村 山下さんはどうなんですか？  
山下 ん？  
木村 そういう話、どうなんですか？ いるんですか？ 彼女  
山下 あー  
田中 ざんねーん、山下さん結婚してますー  
木村 ええ、ホントですか  
山下 ああ、うん、結婚してたね  
木村 奥さん、いるんですか  
山下 いると言うか、  
木村 、と言うかなんですか？  
山下 死んだよ、去年  
木村 え？  
田中 ・・・え、亡くなられたんですか？  
山下 え、うん  
木村 ええー  
山下 ・・・

田中 ……  
木村 えー  
山下 ……  
木村 ほんとなんですか？  
山下 うん  
田中 いつですか？  
山下 だから、去年、年末  
木村 あ、  
田中 あの、この度は  
木村 (習って頭を下げる)  
山下 ああ、ああ、いい、いい、いいの、そういうの

2人とも、頭を上げる

田中 ……大丈夫なんですか  
山下 いい、いい、大丈夫、大丈夫  
田中 はい…  
山下 いいから、いいから、そういうの  
木村 いや、  
山下 いいから、  
田中 なんて隠してましたんですか  
山下 だって、言っちゃって変わらないでしょ、べつに  
田中 いや  
山下 でしょ  
田中 はい  
木村 え、去年も、ずっと普通に働いてましたよね  
山下 だから、いーの、ほんとに、  
木村 でも  
山下 ほんとにそういう文化ないから  
木村 文化ないって、そういう話じゃ、  
山下 ほんとに、ないから  
木村 ないというか  
山下 だって、休めないでしょ、ここ  
木村 まあ、そうですけど  
山下 よくわかんないんだよね、そういうの、葬式？ とかき、  
木村 ……  
田中 ……  
山下 (唾然とする二人を見て) ああ、ああいうことするだけで、人が死んだことを受け入れるの  
木村 ……  
田中 ……  
木村 ……  
田中 ……  
木村 ……  
田中 ……

間、田中は支度をしている

田中 今日、派遣の人、何時に来るんですか？

木村は帰り支度

山下 あー、11時  
田中 またー、中途半端な時間に  
山下 だって、9時からだったら早いし、10時は微妙だし、



田中 えー、だから、雇いましょうよ、新しい人  
山下 あー、そうそう、来るよ、今日、新しい人  
田中 え、そうなんですか？  
木村 あー、今日でしたっけ？  
山下 あれ、言ってなかったっけ  
田中 訊いてません  
木村 先月、言ってみましたね  
田中 えー  
山下 あらー、木村君、ちゃんと伝えといてよ  
木村 ええ、僕ですか？  
田中 バイトですか？  
山下 ううん、社員  
田中 へー  
木村 なんて言いましたか、名前  
山下 佐藤さん  
木村 あー、そうそう  
田中 何時に来るんですか？  
山下 うん、9時って言ってるんだけど、場所わかりにくいでしょ、ここ、駅まで迎えに行こうかなって  
木村 ああ・・・あれ、間に合いますか？ 9時  
山下 あ、ホントだ、じゃあ、行ってくるから  
田中 はい  
山下 あ、どうする、木村君、せつかくだから、挨拶くらいして帰る？  
木村 あー、そうですか  
田中 はい

山下、退場

田中 (支度しながら)ほんと、鏡見て来た方がいいよ  
木村 こういう、髪質なんですって  
田中 いや、髪質とかいう次元の問題？ それ  
木村 (髪をいじりながら)・・・訊いてなかったんですか？  
田中 だからー、というか、なんで教えてくれなかったの  
木村 いやいや、そっちじゃなくて、山下さんの  
田中 ああ  
木村 というか、僕ですか、そっちも  
田中 だって、あの人が仕事しないのはいつものことですよ  
木村 いや、でも、僕ですか  
田中 そうよ、二人しかいないんだし  
木村 社員なんですか  
田中 木村君は、社員にはならないの？  
木村 いやー、僕は、  
田中 ふーん  
木村 楽になりますかね  
田中 新卒だったら、余計、忙しくなるね  
木村 そうですか？  
田中 だって教えなきゃいけないでしょ、イチから  
木村 あー、確かに、え、でも、いいじゃないですか、そんなもんでしょ  
田中 時期によるでしょー

木村 あー、まー、そうですね  
田中 でも、多分、新卒だよ  
木村 え、なんでですか  
田中 だって、社員だったら、わざわざ前のとこやめてまで、こんなとこ、来ないでしょ、辞めた理由が、よつつつほどやばくない限り、ここよりマシでしょ  
木村 あー、なるほど  
田中 だから、ほんつつつとにペーパーか、マジで問題起こして飛んできた人か、どっちかだねー  
木村 はー  
田中 ま、出会いにまで進展させるかは、木村君しただいねー  
木村 えー、なんでですか  
田中 絶対あれでしょー、木村君、気になった子がいても結局声かけないで、そのうち自分で冷めていくタイプでしょ  
木村 はー、何ですかそのタイプ  
田中 70歳のおじいちゃんでも、気になったら告白とかしてくるんだよ  
木村 え、なんでですかそれ  
田中 いや、だから、前言ったじゃん、しよっちゅう告白してくるおじいちゃん  
木村 森崎さん？  
田中 そうそう  
木村 まーだ言ってくるんですか？  
田中 まだーっていうか、頻繁になつて来てるからね  
木村 えー  
田中 だってほら、忘れちゃってくんだし  
木村 あー  
田中 帰り際に、週一くらいでさ、『初めて会ったあんたに、こんなにしてもらって、ありがとうね、明日からも、明後日からも、その次の日からも、あんたみたいな人に、傍にいてもらいたいなあ』って  
木村 あーはは、付き合っちゃえばいいじゃないですか、もう  
田中 なに言ってるの  
木村 えー、かわいそうですよ  
田中 私だけじゃないからね、面会に来た妹さん？ にも、それ言ったらしくて  
木村 あ、そうなんですか？  
田中 妹さんの方はまだ元気だからさ、いろいろお世話してあげようとするじゃない  
木村 はいはい  
田中 で、今まで何年も暮らしてたんだから、何してほしいとか、そういうツボも抑えてるからさ  
木村 あー、ストライクなんですね  
田中 そうそう、そしたら森崎さん、『あんたみたいな気の利く女性と、家庭を築きたいなあ』とか、言うみたいで  
木村 あはは  
田中 元から、家族でしょう、って  
木村 ですよね  
田中 でも、それ訊いて、妹さん、号泣しちゃって  
木村 あー、やっぱ、忘れられてるのって、なんか、実感しますもんねー  
田中 覚えてないのに、これだけポンポン告白するって、若いころどれだけ盛んだっただらうね  
木村 あー、  
田中 ぷれいぼーい  
木村 うわー  
田中 分けてもらったら、その、血の気？  
木村 はー？  
田中 どうせ、いつでも、出会いがないー、とか言うんでしょ  
木村 ないだけですー

田中 老人ホームのおじいちゃんですら、出会い見つけてるんだよ？  
木村 余計なお世話ですー……結婚してたのは、知ってたんですね  
田中 あー、うん

木村 亡くなってたんですね、奥さん  
田中 年賀状出しちゃったのに

木村 まあ、そういうことじゃないと思いますけど、  
田中 いや、しかも、向こうも普通に返してきたんだよ？

木村 はあ、  
田中 なになにに、文化ないって、そんなレベルの問題？

木村 わかんないですけど  
田中 ね、ぜんっぜん、わっかんないよねー

木村 ー、まあ  
田中 なんも手伝う気配ないし、ここにいて、何してんだらうね  
木村 いや、さー

田中 ……  
木村 悲しくないんですかね

田中 え、なに、心配してるの？

木村 いや、そうじゃないですけど、なんか、  
田中 なに、どうしたの

木村 いや、受け入れられてるのかなあ、って  
田中 さー、ね

木村 ……  
田中 じゃ、行ってくるから、  
木村 あ、はい

田中 (頭を指して)……それ、押さえてたら？  
木村 (鏡を見て押さえながら) えー？

田中、退場

木村 行ってしまった

……死んだ妹のところ、おれは十年前、ちよいちよいあの人に逢ったものだ  
あの人は十七で、おれは三十七だった

なんだっておれはあの時、あの人に恋して、さっさと結婚を申込まなかったのだろう  
造作もなかったのになあ！ そうすれば、今はもうちゃんと、あの人はおれの細君なものにな  
あ

……そう

……さしずめ今ごろは、二人ともあのどしや降りて目をさまして、あの人を神鳴り  
の音におびえると、おれはしつかり抱きしめてやって、「大丈夫だよ、僕がついてるからね」  
そう囁いてやる

ああ、すばらしい夢だ

じつにすてきだ、思わずにっこりしたくなるほどだ  
だが、いかんいかん、おれはまた頭の中がこんぐらかってきただ

……なぜおれは年をとってしまったのだ？ なぜおれの気持があの人に通じないの  
だ？ あの飾り気たっぷりの言い回し、カビの生えた女学式な考え、世の中を滅ぼすもの  
とかなんとかいう、愚にもつかない屁理屈いやはや、じつにやりきれん

それにしてもおれは、まんまと一杯くつたものだなあ！ あの教授閣下をのやくざな痛風や  
みを、おれは心底から崇拜して、まるで牛みたいにやつのために働いてきたのだ！ おれは  
ソーニヤと二人で、この地所から、最後の一しづくまで搾り上げてしまった

おれたちは高利貸みたいなまねまでして、胡麻の油だの、豌豆まめだの、チーズだのを売り  
さばいて、自分たちは食う物も食わずに、一銭二銭の小銭から何千という金を積み上げて、

あいつに仕送りしてやったのだ  
おれは、あいつやあいつの学問が自慢で、それがおれの生き甲斐でもあれば励みでもあったのだ！ あいつの言うこと書くこと、みんなおれにはすばらしい天才的なもの思えた  
・・・・・ふん、ところが今はどうだい  
あいつがいざ退職してみれば、あいつが一生かかって何をやり上げたか、今じゃすつかり見透しだ  
あいつが死んだあと、一ページの仕事だつて残るものか  
あいつは名もない馬の骨だ、ゼロだ！ シヤボンの泡だ！ おれはまんまと騙されたんだ・・・・・

山下、佐藤、登場

山下 はいー、来ましたよー  
木村 あ、おかえりなさい  
山下 はい、どうぞ  
佐藤 佐藤です、よろしくお願ひします  
木村 木村です  
山下 はい、佐藤さん、バイトの木村君ね  
佐藤 で、もう一人パートの、あー、社員か、の、田中さんがいるから  
佐藤 はい  
山下 じゃ、一応デスク、空いてるの、ここだから  
佐藤 え、はい  
山下 散らかつてるけど、ま、とりあえず、自分のデスクの周りだけ、使いやすいようにしてもらつて  
佐藤 はい、あの、他の人は  
山下 あ、4人だよ  
佐藤 え、4人ですか  
山下 そうそう  
佐藤 あ、はい  
木村 ちなみに、いくつですか？  
佐藤 21です  
木村 おー、彼氏とかいるんですか？  
山下 そういうの、セクハラになるんだよ、最近  
木村 えー  
佐藤 あ、はい、いちおう  
山下 だつてー

田中、忘れ物を取りに登場

佐藤 来月、結婚します  
木村 あ・・・あ、そー・・・  
山下 おめでとうございます  
木村 、おめでとうございます  
佐藤 、ありがとうございます  
木村 あの、あ、田中さん  
山下 あー、田中さん、(佐藤に) 田中さんね、  
佐藤 佐藤です  
田中 田中です、よろしくお願ひします  
佐藤 よろしくお願ひします  
田中 えー、なになに、結婚するの？ 佐藤さん？

木村 あー、そう、山下さん、  
田中 え、あれ、でも21ってことは？ 学校出てすぐ？  
佐藤 あ、はい  
田中 相手も？  
佐藤 はい、同じ学校です  
田中 へー、え、お金とかは？  
佐藤 両親が、お金を出してくれて  
田中 あ、式とか挙げるんだ、やっぱり  
佐藤 はい、親戚だけの小さい式ですけど  
田中 へー  
佐藤 はい  
木村 あの、この前、入居ご希望で電話をいただいた、  
田中 まあ、小さい式の方が良いっていうしね  
佐藤 そうなんですか  
田中 大きい結婚式上げる人ほど、別れるんだってさ  
山下 芸能人とかそうだね  
田中 ですよー  
山下 であ、うちは、普通の式でしたけどねー  
佐藤 へー・・・  
木村 あ、そうそう、こないだ入居ご希望されてた、谷本さんなんですけど  
山下 はいはい、なんでしよう  
木村 介護レベル、引き上げになるかもしれないかもしれないから、入居、見送りさせてほしいそ  
うです  
山下 あー、そうなの  
木村 はい、昨日、電話がありました  
山下 じゃあ、また、レベル別の料金、見積もり出して、資料お送りして差し上げて  
木村 はい、わかりましたー  
田中 じゃあ、いつてきまーす  
山下 あー、田中さん、先に、佐藤さんに、施設の案内してあげて  
田中 あ、はい  
佐藤 お願いします  
田中 、じゃあ、行こっか  
佐藤 はい  
山下 じゃあ、田中さんに着いて、案内してもらって  
佐藤 はい  
田中 (準備している佐藤に) 行こー  
佐藤 あ、はい  
山下 お願いします  
木村 おつかれさまです  
佐藤 え？  
山下 あ、帰るから、木村君  
佐藤 あ、  
山下 夜勤だったから  
佐藤 あ、おつかれさまです  
木村 お疲れ様ですー  
山下 はい  
田中 (出ようとしているが佐藤がついてきてないので) 佐藤さん？  
佐藤 あ、はい

田中、佐藤、共に退場  
間

木村 いい子そうですね

山下 だねー

木村 続くといいですね

山下 周りに同じ仕事の人がいると、続くと思うよ

木村 あー

山下 離婚する人もいれば、結婚する人もいるんだねー

木村 ああ、はい

山下 うん

木村 山下さんは、

山下 ・・・・うん？

木村 あの・・・

山下 え？ え、なに？

木村 ・・・・悲しくないんですか？

山下 受け入れられないほどじゃないね

木村 ・・・・そうですか・・・

山下 まあ、そういうことで、今晚中に資料作成して、またお電話しといて、さっき言ったの

木村 あ、はい・・・

山下 介護レベル1と2の月額差額は？

木村 あ、月30日換算で、179100円、引く、159900円で、19200円です

山下 2と3なら？

木村 199800円、引く、179100円で、27000円です、一割負担で2700円

山下 さすが

木村 歩く電卓ですから

山下 じゃ、よろしく

木村 はい

山下 じゃ

佐藤、登場

木村 あ、

山下 ん？

佐藤 あ、

山下 あー、早いね、大体わかった？

佐藤 あ、はい、いえ、あの、お年寄りの方が、

山下 利用者さん？

佐藤 あ、はい、利用者さんが起きて、歩き回っていたので

山下 あー、

木村 で、途中で

佐藤 あ、はい、田中さんが、こっちに帰ってるようになって、ってなるほどー

山下 (木村に) あ、じゃ、お疲れさま

木村 あ、はい

山下 じゃー

木村 お疲れ様です

佐藤 お疲れ様です

木村、退場

間

佐藤 (手持無沙汰に)・・・あの、なにをしたら

山下 あ、いいよ、気にしないで休んで、

佐藤 あ、はい

山下 また、暇になったら、田中さんに案内してもらおうから  
佐藤 はい

山下、退場

佐藤、カレンダーをめくる

木村、登場

佐藤 あ、お疲れ様です

木村 おつかれさまー

佐藤 (実用書などを読んでいる)

木村 ・・・・今日もずっと待機？

佐藤 あ、全然大丈夫です

木村 待機なんだ

佐藤 ・・・・はい

木村 田中さんに話してみようか？

佐藤 いえ、忙しそうなので

木村 でも、ずっとこのままじゃねー

佐藤 ええ

木村 まあ、たしかに、鬼の形相で働いてる田中さんとはね、働きたくないけどね

佐藤 はい、あ、いえ

木村 まあ、最初は、そんなもんだから、みんな、田中さん

佐藤 木村さんも、そうだったんですか？

木村 うーん、俺が入ったときは、結構人数いたからね、社員も

佐藤 あー

木村 でも、ああ見えて、田中さん、結構利用者さんには親切だから、モテたりするらしいけどね

佐藤 え？ モテる？

木村 あ、そうそう、アルツハイマー？ の、利用者さん、にさ、仕事じゃなくて、普通に親切な

佐藤 女の人だと思われて、で、告白とかされたり

木村 (へー！ とか、びっくりした相槌)

佐藤 ね、びっくりだよね、でも、仕事はできるからね、確かにー

木村 あの、木村さんは、アルバイトですよ

佐藤 そうそう

木村 社員になろうとは思わないんですか？

佐藤 あー、まあ、

木村 木村さんくらいの男性だったら、せつかくなら正規で雇用したがるんじゃないですか？ 施

木村 設の方から

佐藤 んー、俺は、そんなに、なに、がっかりこっちで働きたいわけじゃなかったし、まあ、今、

木村 がつつなんなりだけ・・・演劇？ お芝居？ やってて

佐藤 あー、えー、そうなんです

木村 あー、そうそう、演技するの、役者？ やってて、わかる？

佐藤 小学校のころ、やりました、クラスで、

木村 あー、まあ、そういうやつ、そういうやつ？ まあまあ、そんなやつ

佐藤 へー、どこかで集まって、やってるんですか？

木村 うん、そうそう、社会人とかで

佐藤 大体、そうゆうの、稽古は夜だから、みんな昼働いて、で、夕方から稽古して、土日に本番して、って感じで集まって  
木村 だから、厳しいんだよね、いまここつきりだし、交代してくれる人いないから  
佐藤 今は、やってないんですか？  
木村 あー、俺は出てないんだけど、劇団？ その、一緒につくってる他の人たちは、また今度、やるみたいだよ  
佐藤 へー、すごいですねー！  
木村 観たことある？ 芝居とか、最近  
佐藤 いえ  
木村 だよー  
佐藤 でも、観てみたいです  
木村 あ、じゃあ、今度、うちでやつ、紹介するわ  
佐藤 あ、はい、お願いします  
木村 まあ、観ないよねー、なんかないと、そういうの  
佐藤 え？

木村 ほら、知り合いが出てる、とかさ、ないと  
佐藤 あー・・・人、増えないんですか？ ここ  
木村 ー、どうだろうね  
佐藤 せっかくなら、木村さんが出てるところを観たいですし  
木村 でも、一気に雇う方が、大変だしね、多分、逆に  
佐藤 あー・・・

木村 あ、逆に、田中さんは、もともとパートで、最近やっと社員になったのね  
佐藤 そうなんですか  
木村 うん、田中さんも、社員増やした方がいいって言ってるんだけどね  
佐藤 ええ・・・

木村 うん、あれ、山下さんは？

佐藤 あ、なんか、コンビニ？ 行くなって言っていました

木村 あ、お菓子か

佐藤 あ、多分

木村 一日一回は、行くから、ああやって  
佐藤 お菓子好きなんですか

佐藤、なんとなく手を伸ばして、山下のお菓子を取ろうとする  
木村、慌てて止める

木村 あ、あ、あー！

佐藤 え？

木村 いま、何しようとしてる？

佐藤 え・・・

木村 触らない方が、いいと思うなあ

佐藤 (手を引つ込めて)・・・え

木村 いや、あー、だめだね

佐藤 山下さん、いやなんですか、人にも触られるの

木村 うーん、なんだろうね、わけわかんないくらい怒るから、触ったら

佐藤 ・・・・

木村 まー、なんか、自分の領域？ みたいな、いやらしいよ、そういうの

佐藤 へー

木村 ほんとほんと、

佐藤 えー

木村 結構前んだけど、アルツハイマーのおばあちゃんが、目を離してる間に入って来て、ここ



佐藤 木村 え、大丈夫だったんですか？  
木村 佐藤 あ、何もなかったんだけどね、特に  
佐藤 木村 でも、その時に、おばあちゃんが、ご飯の後だったのに、3日も何も食べてないんだー、っ  
佐藤 木村 て、山下さんの身の回りの物、お菓子、全部食べちゃったの  
佐藤 木村 それで、  
木村 佐藤 いや、それだけじゃないの、それで、山下さんの私物も、食べようとしてて、鞆とか  
木村 佐藤 あー  
木村 佐藤 そのあとにね、吐いちゃって、やっぱり、お菓子とか、ノートとかも食べちゃったみたいで、  
木村 佐藤 全部、リバーズ  
木村 佐藤 あー・・・  
木村 佐藤 しかも、鞆の中に  
木村 佐藤 うわ、それは、トラウマになりますね  
木村 佐藤 まあ、そうなんだけどね  
木村 佐藤 それで、怒るようになったんですか  
木村 佐藤 いや、まだあるの  
木村 佐藤 ええ  
木村 佐藤 そこまでは、山下さんも、まあ、あることだからって、あんま、怒ってなかったんだけど、  
木村 佐藤 次の日ね、おばあちゃん、またやって来て  
木村 佐藤 え、またお菓子食べちゃったんですか  
木村 佐藤 違うの、今度は、『昨日はありがとうね』って、手紙添えて、その日のごはんに出てた魚の開  
木村 佐藤 き、ティッシュに包んで、次の日山下さんの鞆の中に入れてたの  
木村 佐藤 ええー(笑)  
木村 佐藤 後で、山下さんに訊いたんだけどね  
木村 佐藤 はい  
木村 佐藤 しかも、気付いたの、帰りの電車の中だったらしいよ  
木村 佐藤 うわー  
木村 佐藤 臭いで  
木村 佐藤 ですよー  
木村 佐藤 で、2日続けて、鞆2個ダメにされて、もう、山下さん、ぜつつつたい俺のものに触らせ  
木村 佐藤 るなー、って、で、潔癖症気味になって  
木村 佐藤 それはー、しかたがないですよー  
木村 佐藤 まーねー  
木村 佐藤 ま、それから、自分のものがちよつとでも動いてたら、過敏に反応するの  
木村 佐藤 いやー、でも、私も、研修の時に食べかけのお饅頭とか貰いましたよ  
木村 佐藤 それとこれとは、また、全然違うんじゃないかなー  
木村 佐藤 でも、嬉しかったですよ  
木村 佐藤 、え、食べたの  
木村 佐藤 あ、はい、せつかくもらったので  
木村 佐藤 あ、そうー(引いている)  
木村 佐藤 え、おいしかったですよ  
木村 佐藤 ああ、よかったですね  
木村 佐藤 え、ダメなんですか？ そういうの  
木村 佐藤 ダメ？ というか、よくー、食べれるね  
木村 佐藤 え、嬉しくないですか？  
木村 佐藤 いやー・・・食べかけのお饅頭  
木村 佐藤 はい  
木村 佐藤 ・・・・  
木村 佐藤 、引いてます？  
木村 佐藤 あ、いや、大丈夫

佐藤 それで、ああ、なんか、嬉しいなあ、って、介護士になるのを決めました  
木村 ええ、それで？  
佐藤 あ、はい  
木村 ああ、そう  
佐藤 え、変ですか？  
木村 変では、(ない)？ かもしれない、あるかもしれないけど  
佐藤 嬉しかったですよ  
木村 、いいー、ひとー、ですなー、  
佐藤 はい、やさしい、おばあちゃんでした  
木村 いや、そっぢゃなくて  
佐藤 え？  
木村 ああ、いいの  
佐藤 ええ、そういうの嬉しくないですか？  
木村 ひとにー、よるんじゃないかなー  
佐藤 そうですか？  
木村 まあ、そういうので、楽しめたら、多分、辛くはないかな、仕事も  
佐藤 はい  
木村 病院介護みたいなのに、お年寄りを元気にしてあげようー、って、意気込んできた人の方が、辛  
佐藤 くなったりするの・・・田中さんみたいに  
木村 ・・・・え、なんでですか？  
佐藤 ー、施設とか、症状によっては、ケースバイケースなんだけど、例えば、リハビリとかだ  
木村 とさ、うんー、あ、急性期、慢性期の違いとか習った？  
佐藤 あ、はい  
木村 そうそう、急性期とか、回復期の人のリハだとさ、極端な話だと、治ったときに、一緒に歩  
佐藤 いてて、どう？  
木村 嬉しいです  
佐藤 そう、やった分、嬉しいじゃん  
木村 はい  
佐藤 けど、大体、ここでの介護ってその慢性期だから、まあ、そういう、喜びが帰って来るって  
木村 よりも、一緒に、歩けるように、現状維持というか・・・一緒に、衰えていくような気にな  
佐藤 っちゃうんだよね、多分、人によって  
木村 ああ・・・  
佐藤 ・・・・まあ、佐藤さんは、そういうのも、ちゃんと知って、こういう方面に決めたんだと思  
木村 うけどさ  
佐藤 いえ、私は、やっぱりお饅頭で、施設介護を決めました  
木村 (思わず)はあ？  
佐藤 え、やっぱりおかしいですか？  
木村 いや、じゃあ、まあ、訊いたところでなんだけど、そもそも、なんで、専門学校に入ったの？  
佐藤 え、なんでですか？  
木村 だって、専門学校は行ったら、就職の道は、ほぼほぼ決まっちゃってるわけでしょ  
佐藤 あー、そう、ですかね  
木村 そうでしょ  
佐藤 なんかに、手に職、手に職、って言いますから、やっぱり、一応、何か資格は取っといた方が  
木村 いいのかなあ、って  
木村 はー  
佐藤 やることが決まってないなら、専門学校で、自分の、就職の武器になるものを、しっかり見  
木村 つけた方がいい、って言われて  
佐藤 でも、そういうのって、資格取ったなら就職でしょ、って空気にならない？ 周りが  
木村 それはー、あまり気にしてなかったですけど、就職するつもりも最初はなかったですし  
佐藤 え、じゃあ、じゃあ、就職するかは、決めますに専門学校に入ったの？

佐藤 はい  
木村 でも、わざわざ、介護選ばなくても  
佐藤 木村さんだって、資格持つてるのに社員になってないじゃないですか  
木村 まあ、そうだけど、でも、食べかけの大福で就職決めなくても  
佐藤 お饅頭です、食べかけの  
木村 あ、はい  
佐藤 ・・・  
木村 はい、そうなのー  
佐藤 はい  
木村 頑張ってるね、  
佐藤 はい

田中、登場

田中 お疲れ様ですー  
佐藤 お疲れ様です  
木村 あ、お疲れ様ですー  
田中 あれ、山下さんは？  
木村 あー、コンビニ？ 行ってるらしいです  
田中 あー  
木村 はい、なんか、あったんですか  
田中 あー、まだ、夜の薬の在庫とか、届いてないよね  
木村 はい、あー  
田中 ないのね、もう  
木村 えー、やばいですね  
佐藤 え、大丈夫なんですか？  
田中 プラセボもないからなー  
木村 えー、まじですか、あれ、探さなくていいんですか  
田中 まあ、山下さんしだいでしょ、もう  
木村 えー  
田中 だって、一昨日ちゃんと行ったし、  
木村 まあ、そうですけど  
田中 (座って待機している)  
木村 戻らなくていいんですか？  
田中 ああ、今、テレビ見てるから  
木村 ・・・  
田中 派遣の子もいるし  
木村 はあ(とか、曖昧な返事)

山下、登場

山下 たいまー  
田中 あ、お疲れ様ですー  
木村 おつかれさまですー  
佐藤 おかえりなさい  
山下 (コンビニの袋からお菓子を取り出して並べながら) おつかれさまー、木村君最近早いねー  
木村 あ、はい  
田中 あの、利用者さんの夜の薬、まだ届いてないんですか？  
山下 あー、そうだね、まだみたい、  
田中 どうします？

山下 あー、プラセボ？ だしといて、  
田中 いや、プラセボも、数足りないんですよ  
山下 え、あらー、  
佐藤 (木村に) 偽薬もないってことですか？  
木村 みたいだね、  
山下 ー、じゃあ、(コンビニの袋から駄菓子ラムネを出して) これだしとこうか  
木村 ー  
田中 あー、はい  
木村 いや、さすがに、バレるでしょー  
山下 そうかなー  
田中 でも、ラムネの方が効くって、みんな言ってるよ  
木村 ええー、うそでしょ  
田中 ほんとほんと、『赤い色した、少しシユワシユワした薬の方が、よく効くのよ』って、おば  
木村 あちゃん、結構いるから  
田中 ええ、マジですかー  
木村 うん  
田中 じゃ、よろしくー  
山下 ーい、(行きかけて) あ、うんち、オーケーだから  
田中 あ、はーい  
木村 じゃ、おつかれさまー  
田中 お疲れ様です  
佐藤

田中、退場

木村 えー、味でばれるんじゃないですか？  
山下 噛み砕かなかつたら大丈夫でしょ  
木村 ー  
山下 大丈夫、大丈夫、  
佐藤 あの、気になってたんですけど、あの、うんち、オーケー、って、なんの挨拶ですか？  
木村 え、ああ、挨拶というか、いつも、朝晩に確認するの、利用者さんのトイレ、で、その確認  
佐藤 あ、なるほど  
木村 基本的に田中さんと二人だから、朝まず田中さんが確認して、夜のうんち、引継ぎの時に、  
木村 (はー、とか、ひー、とか、相槌)  
佐藤 そうそう、そういう確認は習ったでしょ  
木村 はい  
佐藤 うんうん、その確認  
木村 (ふー、とか、へー、とか、相槌)  
木村 日勤の仕事は朝にうんちを確認して始まって、夜にうんちを引き継いで終わり  
佐藤 うんちに始まり、うんちに終わる  
木村 (ほー、とか、相槌)  
木村 そうそう、本人に訊いても、覚えてない人とかいるからね  
佐藤 なるほど  
木村 あれだね、早く、現場に出られるといいね  
佐藤 あ、はい  
木村 毎日さ、結構、遅くまで残って、擦り減らない？  
佐藤 大丈夫です、利用者さんと触れ合っていると、元気がもらえますし  
山下 あー、模範解答だねー  
木村 ー、夜遅いの心配されない？  
山下 やっぱり、あれなの？ 向こうも、遅いの？

佐藤 あ、いえ、まだ、同棲はしてないんです  
木村 あ、そうなんだ  
佐藤 はい

田中、登場  
足早に帰り支度

田中 お疲れさまですー  
木村 お疲れ様ですー  
佐藤 お疲れ様です  
山下 はい、お疲れー  
木村 つてことは、いま、引越しの準備とかもしてるんじゃないの？  
佐藤 はい、お互い新しい職場のこともあるんで、忙しくて、今、真っ最中です  
木村 そうなんだ  
佐藤 はい  
木村 大変だー  
佐藤 いえ、まあ、お互い、最初は、そんな感じかなって  
木村 えー、旦那さんも、同じくらい働いてるの？  
佐藤 いえ、私の方が長いですけど  
木村 だよー、毎朝、早くから、夜遅くまで働いてるの、大変じゃない？  
佐藤 はい、あ、いえ  
木村 わー  
田中 佐藤さん、まだ別居なんだ  
佐藤 はい  
田中 気を付けたほうがいいよー、同棲してみるとやっぱり違ったっていうのあるから、私が言うんだから、間違いないから  
佐藤 あ、はい  
山下 説得力ありますねー  
田中 まあ、  
山下 あー、こないだ離婚したの、田中さん、先週？  
田中 佐藤さんが来た日ですかね  
山下 あー  
佐藤 そうなんですか  
田中 実際は、もつと前から、ダメになってましたけどね  
山下 あれ、田中さんは、なんで別れたの？  
田中 あ、ああ、浮気です  
山下 あら  
木村 あー  
佐藤 えー、そうなんですか・・・  
田中 うん、大丈夫、大丈夫  
佐藤 ・・・・あー・・・大変ですね・・・  
田中 え、あ、違うよ、浮気したの、私だよ  
山下 ほおー  
木村 ええ  
佐藤 あ  
木村 そうなんですか  
田中 うん、だから、全然、大丈夫、私の方は  
木村 へー  
田中 まあ、両方、ダメになっちゃったんだけどね  
木村 両方？

田中 ああ、浮気相手も、旦那も  
木村 あー、まあ、そりゃあ、  
山下 そういうのってき、どうなの？ どっちが好きとかあるの？ 女の人  
田中 あー、どうなんでしょう、考えたことないです  
山下 ふーん  
田中 、佐藤さん、帰らないの？  
佐藤 あ、はい、もう少し居て、あの、お仕事見て帰ります  
田中 あ、そー、まじめだねー  
佐藤 いえ  
田中 木村君、派遣の人帰るまでに、交代してあげてねー  
木村 はいー・・・あ、あの、飲んでました？ ちゃんと、ラムネ  
田中 あー、うん、ふつーに  
木村 そうですか  
田中 うん、じゃ、お疲れ様でしたー  
木村 おつかれさまですー  
佐藤 お疲れ様でした  
山下 はいー、おつかれー

田中、退場

山下 ね、パワフルでしょ  
木村 えー、まあ・・・いやー、意外ですね  
山下 まーねー  
木村 でも、そんな時間あったんですね、忙しいのに  
山下 まあ、それくらいパワフルじゃないと、やっていけないでしょ  
木村 いや、まあ  
山下 あー、気、使わなくていいからね  
佐藤 あ、はい  
山下 うん、嘯みつかれたりするんだって  
佐藤 え？  
山下 嘯みつくの  
山下 ああ、らしいですね  
佐藤 そう、川口さん、わかる？  
山下 川口さん？  
木村 あの、水泳やってた、って  
佐藤 あ、はい  
山下 そうそう、昔水泳やってて、で、ぼけてるんだけど、むっきむきな、川口さん  
佐藤 あ、たしかに  
山下 だから、最初は結構、大変だったらしくて、体は元気だから、運動するとか、泳ぐとか、運動の時間だ、って、言ってる  
佐藤 へー  
山下 で、テレビですよ  
佐藤 テレビ？  
山下 そうそう、見せてたら、みんな静かになるから  
佐藤 なるほど・・・  
山下 あ、さっきの、うんちの話も  
佐藤 はい  
佐藤 それも、確認しても、どうしても出しちゃう人とかいるから、そういう時は、もう洗濯機に  
佐藤 放り込んで、ともかく回すの  
へえ

山下 三種の神器様様ですよ  
佐藤 あー、

山下 、じゃ、派遣の人帰るまでに、交代してあげてねー  
木村 はい、え？ どこ行くんですか？

山下 え？ コンビニ  
木村 あれ、さつき

山下 あ、ラムネ、なくなったから  
木村 え？

山下 ラムネ、今日、ほら、あれ、なくなったから、だから  
木村 あ、あー

山下 佐藤さんは、今日も見学？  
佐藤 あ、はい

山下 真面目だねー  
佐藤 いえ、早く、皆さんのお力になりたいので、  
おー

木村 僕もそろそろ、行ってきまーす  
山下 行ってらっしゃーい

木村 (佐藤に) あ、いつでも、見に来ていいからね、あと就寝だけだけど、実際に利用者さんに  
佐藤 触れるのと触れないのは、全然違うし

佐藤 あ、はい

山下 昼間は観てるだけでもね  
佐藤 はい、あ、田中さんも忙しいので

山下 努力家だー  
佐藤 いえ、

佐藤 (並んでるお菓子を出して) あ、それ、お腹空いたら食べていいからね  
え？

木村、準備の手を止め、様子をうかがっている

佐藤 いいんですか？  
山下 うん

木村 (様子をうかがっている)  
佐藤 (恐る恐る) いただきます

佐藤 佐藤、手を伸ばして、お菓子を食べる

山下、退場  
何とも言えない程度の間

山下 じゃあ、行ってきます  
佐藤 はい

木村 大丈夫だったね  
佐藤 はい

木村 ラムネも、残り、食べちゃったら  
佐藤 それはさすがに  
木村 買ってくるんだし  
佐藤 いえ・・・

木村 (準備の手を休めて)・・・なーんで2人とも、あんなやる気ないのかなー  
佐藤 え・・・？

木村 ほんら、さつきも、市販のラムネとか  
佐藤 ああ・・・よく、あるんですか？  
木村 いや、ないない、おかしいでしょ  
佐藤 ですよ  
木村 田中さんも、田中さんでしょ、なんで、そんなんで、いいと思ってるのかなあ  
佐藤 ええ・・・  
木村 テレビとかもさ、あつた方が確かに楽だけど、ね、何もしなくていいから  
佐藤 はい・・・  
木村 でも、みんな、自分の親がいざそうなるってなったら、違うと思うんだよな  
佐藤 ・・・・そうですね・・・  
木村 まあ、俺も、がちがちでこういう業界で働きたいわけじゃないから、わかんないけどさ  
佐藤 いえ、その通りだと思います  
木村 まあ、確かにラムネ配ってる日の方が、みんなちゃんと寝てくれて、夜勤楽だなあ、って思  
木村 つてたけどね  
佐藤 ええ、ラムネの方が効くのは、ほんとなんですか？  
木村 まあ、たぶん  
佐藤 えー  
木村 やっぱり、明日当たり言ってみようか、田中さんに  
佐藤 あ、いえ、田中さんも忙しいので、  
木村 あー、そうねー、  
佐藤 はい・・・  
木村 うーん、最初はね、割とみんな、佐藤さんみたいな感じなのね  
佐藤 そうなんですか  
木村 うん、まあ・・・ね、じゃあ、行って来るから、また、見に来たかったら見にきて  
佐藤 あ、はい  
木村 あ、でも、今日くらい、早く帰ってもいいか  
佐藤 あ  
木村 ああ、気にしないで、お疲れさまー  
佐藤 あ、はい、お疲れ様です

木村、退場

佐藤、カレンダーをめくる

田中、登場

佐藤、カレンダーをめくる

田中、浅野いにおなどを読んでいる

木村、登場

木村 お疲れ様ですー

田中 お疲れさまー

佐藤 お疲れ様です

木村 ・・・・(佐藤に) 今日、はどう？ 出れた？

佐藤 あ、はい、利用者さんの、トイレの介助を、

木村 ああ、そう、どうだった

佐藤 結局、田中さんに助けていただいて

木村 最初はね、え、今は？

佐藤 あ、テレビの時間で、

木村 あ、あー

佐藤 はい

田中 熱心だよねー、佐藤さん

佐藤 いえ、



田中 まあ、それだけやる気あったら、見てたらそのうちできるようになるし、  
佐藤 はい  
田中 あ、うんち、みんなオーケーだから、山下さん来たら、私も帰るから、あとよろしくね  
木村 あ、はいー  
佐藤 ・・・・  
木村 ・・・・え、定時を待ってるんですか？  
田中 え？ 違うよ？ 山下さんを待ってるの  
木村 あー、あれ、田中さんここ居て待って、大丈夫なんですか？  
田中 え？ ああ、今、テレビ見てるし、派遣の子もいるし、大丈夫だよ  
木村 ああ、あー、なんか、なんだろう  
田中 ん？  
木村 いや、なんか、そういう、テレビ見せとけばいいや、みたいなの、やめませんか？  
田中 え、なに、なに、  
木村 楽だから、テレビ見せとこう、みたいなの  
田中 え、なに、なんで？  
木村 いや、なんか、それでいいのかな、って、思いませんか？ 佐藤さんとかに悪いと思いませんか？  
佐藤 あの、わたしは、  
田中 佐藤さんにちゃんと仕事、教えなさいってこと？  
木村 そこまでは言ってますけど、せっかくやる気もあるんですから、もうちょっと頑張っても  
田中 いいんじゃないですか？  
田中 介助もして教えてって、それとだけ大変かわかる？  
木村 わからないですけど  
田中 それで誰か怪我させた方が、大変になるでしょ  
木村 でも、もうちょっと、頑張れるんじゃないですか？  
田中 だってそんなに給料もらってないし  
佐藤 私のことはいいですから  
木村 よくないでしょ  
田中 明日からできるだけ、佐藤さんと出るから、  
佐藤 あ、あの、お願いします  
田中 まあ、佐藤さんも、明日から、よろしくね  
佐藤 あ、はい  
木村 ・・・・  
佐藤 ・・・・  
田中 慣れた？ 佐藤さん  
佐藤 あ、はい、少しずつ  
田中 そう、  
佐藤 ありがとうございます  
木村 ・・・・やっぱ、なんか、違うと思うんですよね  
田中 ・・・・  
木村 ・・・・  
田中 だって、一応、働いてるわけじゃないですか  
働いてるよ？  
木村 だから、そういうのやめませんか？  
佐藤 あの、明日から頑張るので、  
木村 いや、佐藤さんの話だけじゃなくてね、今、今の話をしてるの、この時間の  
田中 え、なんで、木村君も、夜勤中に、暇なときは寝てるんでしょ？  
木村 いや、そうじゃなくて、  
田中 働いてるときに、そういうことするなって話でしょ？

木村 はあ？

田中 一応、向こう言って、働いてるようにしろ、ってこと？

木村 え、え？ そういう話でしたっけ？

田中 違うの？

木村 夜勤中は、お年寄りも寝てるから、木村君も寝てもいいわけで、今はそういうわけじゃないから、ちゃんと働けて言ってる？

田中 、テレビ見せてるだけでいいんですか、って訊いてるんですよ

木村 え、なんで？

田中 なんて？

木村 え？ なんで？

田中 だって、テレビ見るより、やることあるでしょ、利用者さんにもなにするの？

木村 だから、体動かす時間なんじゃないですか、今、

田中 それして、どうなるの？

木村 それが仕事でしょ

田中 それ、で、ど、う、な、る、の？

木村 だ、か、ら、え？ テレビ見せてるだけが、介護なんですか？

田中 それは違うでしょ

木村 そうですよ

田中 で、体動かして、どうなるの？

木村 だから、体動かして、もっと、自分で身の回りのことができるようにしてあげる時間があるんじゃないですか？ まさに、この時間が

田中 だから、それしてどうなるの？

木村 は？

佐藤 あの、

田中 だから、そうしたらどうなるの？ もっとより良い、生活が送れるようになるの？

木村 それを、提供するの、仕事でしょう

田中 それってさ、わかる？ お年寄りが元気になって今より動くようになったら、手が回らなくなるでしょ、

木村 手を貸さなくてもいいようにするのが、

田中 手が回らなくなると、私たちがパンクする方が先でしょ、歩き回れるようにしろ、ってこと

木村 じゃあ、じゃあ、それが面倒くさくて、テレビの前で飼い殺しですか

田中 飼い殺しって言い方は、おかしいでしょ、私はここでできる、最善のことをしてるわけだし最善、って、大変になるかもしれない、もっと頑張ることじゃないんですか？

田中 あのさ、あのさ、そもそも、手が回らなくなると、怪我させたら、どうするの？

木村 ……

田中 ……テレビの方が見たい人もいるでしょ、(佐藤に) ねえ

佐藤 あ、……はい、

木村 ……生きがい、って、学校でも習わなかったですか？

田中 そういうのってさ、自分で見つけるものでしょ

木村 ほんとにそう思いますか？

田中 そうでしょ

木村 アルツハイマーでも、

田中 (遮って) どんな病気でも！ 歩けなくても！ 全身不随でも！ 自分で見つけるものですよ！ 自分で自分が生きていくの、かかって！

木村 ……本当にそう思ってますか？

田中 じゃあさ、替わってみる、シフト、日勤と夜勤と、

木村 ……いいですよ

田中 やってみたいいいよ、絶対、無理だから  
木村 田中さんは、離婚もして、夜帰らなくてもいいですからね  
田中 はあ？  
木村 生きがいとか、自分で何なのかもわからないから、他人の心配もできませんからね！  
田中 は？！  
佐藤 やめましょうよ

山下、コンビニの袋を下げて、登場

えー、なになに、喧嘩してる？

・・・

(帰り支度を始める)

どうしたの？

・・・いえ・・・

えー、なになに、どうしたの？

・・・

あの、山下さん

うん？

田中さんと、シフト、交代させてください

えー、なになに、どうしたの、突然

いや

え、田中さんは、それでいいの？

はい、2人ともやる気があるみたいだし、任せた方がいいんじゃないですか

あー、そう、じゃあ、いいよ

え？

いいよ、シフト交代で

そんなに簡単に交代で、いいんですか？

まあ、2人とも、仕事内容はわかってるし、仕事はちゃんとできるし、問題ないでしょ

はい

その方が、都合いいんだよね？ 田中さんも

あ、はい、私はどっちでも、お疲れ様ですー

あ、ああ、いつからにする？

ああ、明日からでも、大丈夫ですよ

じゃあ、明日の夕方まで、僕が入るんで、夜勤の時間に来てください

はい、じゃあ、お疲れさまー

あ、おつかれさまー

お疲れ様です、え、大丈夫なんですか、木村さん

大丈夫でしょ

え、喧嘩したの？ また？

大丈夫です、派遣の人帰るんで、行きますね

あー、待って待って、ホントに変わるの？

あ、はい

じゃあ、夜勤と日勤の給料の差は？

手当25%、時給1100円に対して1375円です、275円の差です

さすが

歩く電卓ですから

バイトで日勤に変わったら、給料たぶん、減るけど、いいの？

はい

わかった

(佐藤に)今日は帰って、明日から、頑張ろう

佐藤 あ、はい、よろしくお願ひします  
木村 じゃ、行ってきます  
山下 はい  
佐藤 お疲れ様です

木村、退場

山下 ……あー、なんて？  
佐藤 なんて言ってた？ 2人、  
山下 ああ、あの、もっと、利用者さんのために時間を使った方が、って  
山下 あー  
佐藤 テレビじゃなくて  
山下 なるほどねー  
佐藤 山下さんは、どう、思いますか  
山下 いやー、俺はー、うーん、そうね、わからないかな  
佐藤 え、  
山下 その方がいいと思うなら、そうしたらいいし、やる気がある人が、前に出てやったらいいんじゃないかな  
佐藤 (はあ、とか、曖昧な相槌)  
山下 まあ、俺は、出たことないからね、実際に、現場には  
佐藤 え、そうなんですか  
山下 うん、だって、免許、資格？ 持ってないもん  
佐藤 あ、そうだったんですか  
山下 うん、一応、雇われ経営者みたいなもんだよね  
佐藤 そうだったんですか・・・  
山下 佐藤さんは、どっちが言ってることが、正しいと思う？  
佐藤 どっちが、正しいか、ですか  
山下 うん、俺は、実際に、そういう苦労わからないからさ、わからないもん  
佐藤 はい・・・  
山下 だから、こう、ちゃんとしたこと言ってる人が言ってるような、そういう環境にした方が、いいんじゃないの？  
佐藤 2人とも間違ったことは、言ってなくて、私もそんなに実際に二人が言ってるような苦労は、まだ経験してないので、  
山下 あー、じゃあ、どっちの意見に、共感する？  
佐藤 どっち・・・  
山下 だって、正しいと思わないと、共感はしないでしょ、明らかにこれは間違いだ、って思うような考えに、共感できないでしょ  
佐藤 はい、  
山下 どう思ったの？  
佐藤 あの、どっちというか、木村さんが言ってるように、利用者さんに接したいと思うのは共感します、けど、田中さんが言ってる、大変さにも、納得します  
山下 へー、半々ですか、  
佐藤 ……はい  
山下 ま、決められないよね、そういうのって  
佐藤 はい  
山下 でも、決めて行かないと、仕事もできないからね  
佐藤 はい  
山下 とりあえず、明日からは、プラン木村で行くらしいから、頑張って  
佐藤 あ、はい、頑張ります

山下 じゃ、今日は、帰って、明日から、またよろしく  
佐藤 はい、お疲れ様です  
山下 はい、お疲れさまー

佐藤、退場  
山下、カレンダーをめくる  
山下、退場  
木村、登場  
佐藤、登場

佐藤 あの、あの、あの

木村 え、なに？

佐藤 蜂です

木村 え？ なに？

佐藤 あ、すみません、休憩中に

木村 あ、うん、

佐藤 あの、蜂がいるみたいで

木村 え、蜂？ なんで？ どこに？

佐藤 あの、部屋に

木村 部屋？

佐藤 なんか、たくさん見るみたいで、ものすごく

木村 ええ、どこに？ 部屋？

佐藤 はい、森崎さんの

木村 あ、森崎さんね

佐藤 はい

木村 あの、大丈夫だから、それ

佐藤 え、大丈夫なんですか？

木村 うん、あの、違うの

佐藤 え、なんでですか、来てくださいよ

木村 違うの、蜂じゃないから

佐藤 蜂じゃないんですか？

木村 あ、だから、森崎さんが言ってたんでしょ、部屋に蜂が出る、って

佐藤 はい

木村 あのね、よくあるの、それ

佐藤 え、よく出るんじゃないか、よく、そんなこと言うの、実際いるわけじゃないから

木村 あ、そうなんですか

佐藤 そうそう、

木村 へー、でも、すっごい、慌ててますよ

佐藤 三分くらいしたら、戻るよ

木村 そんなにすぐにですか

佐藤 うん、何事もなかったかのように、

木村 へー

佐藤 うん、早く、帰ってみてあげて、多分もう普通だから

木村 はい

佐藤 うん、あ、すぐ、休憩、替わるから

木村 大丈夫ですよ、ゆっくりしてもらって

佐藤 いいから、いいから

木村 でも、

佐藤 早く戻らないと

木村

佐藤 あ、はい  
木村 お疲れさまー  
佐藤 お疲れ様です

佐藤、退場  
しばらくして、佐藤、再び慌てて登場

佐藤 あの、あの  
木村 え、なに、どうしたの？  
佐藤 あの  
木村 また蜂って？  
佐藤 いや、なんか今度、〇〇が出るって、  
木村 〇〇？  
佐藤 はい  
木村 え、〇〇って、嘘、森崎さん？  
佐藤 はい、  
木村 そーそれは、新しいなあ、  
佐藤 あの、どうしましょう  
木村 部屋見た？  
佐藤 見れませんよ、だって、ほんとになにかいたらどうするんですか  
木村 でも、多分、また、ぼけてるだけだと思うけどなあ  
佐藤 〇〇ですよ？  
木村 え、嫌いなもの？ そういうの  
佐藤 嫌いというか、怖いですって  
木村 えー、そう？  
佐藤 はい  
木村 ・・・  
佐藤 え、来てくださいよ  
木村 あー、はいはい、わかったから  
佐藤 ・・・  
木村 ・・・？  
佐藤 ・・・先行ってください  
木村 いや、いるわけないって  
佐藤 わかってますけど  
木村 わかったわかった、行くから、絶対ないから  
佐藤 いたら、責任とってくださいね  
木村 ええ、俺の責任？

田中、登場

田中 なにやってんの？  
木村 あ、お疲れ様です  
佐藤 (うろたえている)  
田中 え、なに、どうしたの  
佐藤 なんかも、〇〇が出たみたいで、部屋に、  
田中 え？ なに？ なんで？  
木村 いや、森崎さんが、またなんか、新しいこと言うようになったみたいで  
田中 あ、そうなの、  
佐藤 え、でも、ほんとにいるかもしれないじゃないですか  
木村 そういう心配って、絶対、空回りだから

田中 取り越し苦労っていうんじゃないの？  
木村 あー、そうそれ、だから

・・・

木村 はいはい、もう、行くから、

佐藤 はい

木村 ・・・え、着いて来ないの

佐藤 後から行きます

木村 そー

佐藤 早く行ってください

木村 ちゃんと来てね

佐藤 怖いんですか

木村 違うから、もう

木村、退場

佐藤 (恐る恐る様子をうかがっている)

田中 (後ろから) 大丈夫だから

佐藤 (びっくり) ・・・あ、あ、はい

田中 今まで結構、そういうの、バラエティ？ あったから

佐藤 ○○も、ありましたか？

田中 ○○は、初めてだけど、

佐藤 ・・・

田中 大丈夫だから、早く行ってあげて

佐藤 木村君、平気なふりしてたけど、虫とか猫とか、全然だめだから

佐藤 ええ、そうなんですか

田中 うん

佐藤 あんな、普通に行ったのに

田中 カッコつけてるんだって

佐藤 ええ

田中 大体そんな顔してるでしょ、虫とかダメそうなの

佐藤 確かに

田中 大丈夫だって、きつと

佐藤 はい

佐藤、様子をうかがいながら退場

田中、机の上の本を取る

読み始める田中

田中 どうして出かけていって、教えてやる気におなりになれないのか、わたしには、それがわからないわ

まあ見てらっしゃい、今に平気になりますから

退屈はからだの毒よ、ねえママ

あなたは退屈で、身の置き場もないご様子ですけど、退屈がってぶらぶらしている人がいると、はたの人にまでうつるものなのねえ

論より証拠、このワーニヤ伯父さんは、一日じゅう何もせずに、まるで影みたくにあなたの

後ろばかり追っかけているし、わたしだってこのとおり、仕事も何もほったらかして、ママ

のところへお話に来てしまってください

怠け癖がついたんだわ、しようのないわたし！ あのアーストロフ先生だって、前はごくた

まにしかお見えにならず、せいぜい月に一度ぐらい、それも無理やりをお願いして来て頂い

たものですけれど、今じゃどうでしょう

大事な森も患者も打っちゃらかして、毎日ここへ見えない日はありませんわ  
あなたは魔法使よ、きつと

木村、○○を持って、登場  
田中、慌てて本を閉じる

田中 どうしたの？

木村 ……

田中 ……え？

木村 ……(○○を見せる)

田中 ？

木村 ……なんか、いました

田中 ……なにそれ

木村 なんか、はい

田中 えー、なにそれ

木村 さあ

田中 どうしたの？ 森崎さんの？

木村 はい

田中 えー、かわいい

木村 そうですか？

田中 かわいいじゃん

木村 そうですか？ ……そうですね

田中 うん、え、かわいい、かして

木村 はい

田中、○○を見ている

木村、その田中を見ている

田中 なんか、夜勤も大変だね

木村 あ、はい、日勤も、

田中 そう？

木村 はい、もう

田中 うん、そうだね

木村 ……あの日は、たまたま居眠りしてただけですからね

田中 わかったから、

木村 はい

気まずい間

田中 いい、雰囲気になったね

木村 え？

田中 しせつ、ここ

木村 ああ、はい

田中 うん、

木村 ……え？

佐藤、登場

木村

あー、どうしたの？  
佐藤 なんか、○○、さがしてて、森崎のおじいちゃん



田中 ああ、これ？  
佐藤 はい、なんか、大事だそうで、それ  
木村 ええ、大騒ぎしてたじゃん、さつき  
佐藤 いや、なんか、大切な友人だから、って  
木村 えー、なにそれ、これが？  
佐藤 はい  
木村 えー  
田中 (渡して) はい  
佐藤 (受け取って) はい

佐藤、持って出るときに、〇〇をしげしげとみている

木村 佐藤さん？  
佐藤 あ、はい、  
木村 あー、そうだ(立って)休憩、替わるから  
佐藤 あ、そうですか、いや、いいですよ、もう退勤ですし  
木村 いいよいよ、(〇〇を受け取るうとする)休んでて  
佐藤 そうですか？  
佐藤 あっ・・・(渡す)はい  
木村 (〇〇を受け取る)じゃ  
佐藤 はい

木村、〇〇を持って、退場

田中 お疲れ様  
佐藤 あ、はい、お疲れ様です  
田中 最近、明るいね、みんな  
佐藤 え？  
田中 おじいちゃん、おばあちゃん  
佐藤 あ、はい  
田中 たのしい？  
佐藤 はい  
田中 そう、よかったね  
佐藤 はい  
田中 ・・・・もうね、無理だと思ってた、ここでは、こういうの  
佐藤 こういうの？ って？  
田中 あー、だから、なんだろ、みんなで明るく、っていうの  
佐藤 あー・・・  
田中 大変だと思っけどね、その分  
佐藤 でも、田中さんも、いま、私が、木村さとやってるお仕事を、一人でなさってたんですよ  
田中 まあ、派遣の子もいたけどね  
佐藤 今も、いますから、やっぱり二倍大変だったんじゃないですか  
田中 まあ、そうだけど、  
佐藤 すごいなあ  
田中 人を元気にする方が、大変だよ  
佐藤 そうですか？  
田中 だってそういうのって、こっちにも余裕があるでしょ  
佐藤 ああ・・・  
田中 ・・・・最近ね、森崎のおじいちゃん、元気になりすぎて、毎晩歩き回って、それでこっちに  
話に来るの

佐藤 え、そうなんですか  
田中 うん、でね、毎晩、私のどこ来て『今日もありがとう、あんたみたいなのが残りの人生のパ  
ートナーだったらなあ』って、毎晩口説きに来るの  
佐藤 えー

佐藤 で、昨日ね、昨日、一番すごくて、やっぱり、わかっているのかな、心？ 頭？ は、若くて  
も、体はやっぱり、老いてるんだー、って、自分で、わかっているんだと思う

佐藤 もうそんなに長くないんじゃないかって、だから『残り少ない一日を、尽くしてくれたあな  
たに心と人生の最期をささげたい、最期に一夜を共にしたい』って

佐藤 えー、夜這いですか！

田中 そう、もう、ほんとね、びっくりして

佐藤 すごいですね

田中 しかも、尽くすって、私、ラムネあげて、布団かけてあげただけだからね、

佐藤 あー、そうですね、

田中 ほんと、元気になったよ

佐藤 どうでした？

田中 え？

佐藤 森崎さん、どうでした？

田中 やるわけないでしょ

佐藤 えー

田中 なに言ってるの

佐藤 せっかく熱い思いで告白したのに

田中 うんー、どうせやるなら、川口さんかなー

佐藤 ええー！ どうしてですか？

田中 見たことない？ 川口さんの、

佐藤 え、ええ！？ やったんですか！？

田中 違うよ、お風呂、介助するときに見えたの

佐藤 ああ、なるほど

田中 そうそう

佐藤 やっぱり、スポーツしていると、ああなるんですかね、年とっても

田中 ねー、びっくりだよね、いくつ？ 80前？

佐藤 ソレで、アレですもんねー

田中 その筋力を、維持してるのがすごいですよね

佐藤 ・・・嬉しかったですか？

田中 え？

佐藤 いや、あの、嬉しそうです、田中さん

田中 あー、そうだね

佐藤 あ、それで、森崎さんは、どうしたんですか？ 昨日、そのあと

田中 そう、でね、毎晩、断ってるんだけど、でも、いやな顔一つせずに、にこー、って笑って、  
帰ってくるの、部屋まで、それで、一人でちゃんと寝るの

佐藤 へー

佐藤 ・・・なんかね、いいなあ、って思った、そういうの、私も

木村、登場

佐藤 はい

田中 まあ、だからね、やめようかなって思って

佐藤 え？

田中 ここ

佐藤 ・・・

木村 やめるんですか、田中さん、介護士

田中 あー、いや、介護士辞めるんじゃないで、なんか、違うところでもっと、ちゃんと、そういう風に利用者さんと向き合える場所で、イチから始めたいなあ、って

木村 うん  
田中 そうですか

佐藤 うん  
、頑張ってください  
木村 がんばってください

田中 ありがとうございます

佐藤 次の職場、見つかってるんですか？

田中 まだ、なーんにも

木村 ええ、なのに辞めちゃうんですか

田中 ああ、すぐにじゃないよ、山下さんに言って、次の夜勤の人見つかるまでは、いるつもりじゃあ、ずっといることになりますよ

田中 なんでー？

木村 だって、切羽詰まらないと、仕事しませんよ、きつと、あの人

田中 あー、そういうの、急がないもんね

木村 そうそう、鬼気迫る勢いで、やめます、って、バシッて言わないと

田中 だねー

佐藤 他の施設の資料なら、まだ私、家にあるんで、いつでも行ってください

田中 ああ、ありがとうございます、でも、しばらくは、ここ辞めてから、のんびりしようかなー、って

佐藤 ええ、なにするんですか

田中 なにしようかなー、海とか行きたいなー、せつかく、夏だし

佐藤 えー、いーな

田中 スイカ割りとかしてさ

木村 あ、いいですね、スイカ割り

田中 ねー

佐藤 私したことないんです

田中 そうなの？

木村 あれー？ スイカ割って、ひとりで出来ないんじゃないですか？

田中 海に行く友達くらいいますー

木村 へー

田中 あれ、木村君、戻らなくていいの？

木村 あ、ああ、なんか、派遣の子が、休んでていいですからって

田中 ふうん

### 山下、登場

山下 お疲れさまー

佐藤 お疲れ様です

木村 おつかれさまですー

田中 お疲れ様です

山下 あれ、みんな揃ってるの？ いいの？

木村 あ、はい、そろそろ派遣の子も帰りますし、交代前に、ミーティングというか

山下 あー、

木村 はい

### 間

木村と佐藤、田中にゴーサインの仕草

田中 あの、  
山下 あ、そうそう、なんか、川口さん？ 海パンはいて、上、あがっていったよ  
田中 あ、ええ、なんでですか  
山下 さー、わかんない、むつきむきだったよ、腹筋  
木村 ええ、  
田中 いきなりダメじゃん、派遣ちゃん  
木村 あー  
佐藤 見てきましようか  
山下 うん、  
木村 ああ、僕行きますよ  
佐藤 あ、はい

木村、退場

山下 若いころに鍛えてたら、違うんだねー  
田中 ですかねー  
山下 『わしの全盛期の飛び込みを見せちやる！』って、意気込んでたよ  
田中 飛び込み？  
佐藤 ああ、川口のおじいちゃん、水泳は水泳でも、飛び込みの選手だったみたいですよ  
田中 あー、そうなんだ、飛び込みなんだ  
佐藤 はい、  
山下 これ帰りまでに読んでいて  
佐藤 なんですか  
山下 ー、大事な書類  
田中 え、さっき、川口さんどこ行ったって言ってました？  
山下 ー、上？ 屋上じゃない？  
佐藤 え、危ないんじゃないですか？  
田中 え、なんで止めないんですか？  
山下 行っちゃったし、止める前に  
佐藤 ええ、  
田中 (すでに走りながら) 急いで！

田中、佐藤、走って、退場

山下、カレンダーをめくる

山下、しばらくして、退場

佐藤、木村、田中、喪服で登場

沈黙

木村 なーんか、怒られませんでしたね  
田中 ああ、そうだね、  
木村 なーんか、なんででしょうね  
田中 そうだね・・・  
佐藤 案外、普通でしたね  
木村 ね  
佐藤 もっと、怒られるのかと、思っていました  
木村 それも、逆に、ね  
佐藤 ・ ・ ・ はい  
木村 ・ ・ ・  
佐藤 私たちの方が、落ち込んでましね

木村 なんか、なんで、あんなふうに普通なんだろう  
佐藤 ・ ・ ・  
木村 おじいちゃん亡くなったのに  
田中 すごく、穏やか、だったね  
佐藤 きつと、息子さんたちも、無理してそういう態度をとってるんじゃないですかね  
木村 そうかもね ・ ・ ・  
佐藤 ・ ・ ・ すみません  
木村 ええ、佐藤さんが責任感じるんじゃないでしょ  
佐藤 私が、もっと早く、見つけていけば、  
木村 それはだから、佐藤さんのせいじゃないって、  
佐藤 ・ ・ ・ はい  
田中 うん ・ ・ ・ ごめんね  
木村 ええ、どうしたんですか、田中さんまで、  
田中 なんか、もつと、最初から、ちゃんとやっつけばよかったなあ、って、思った  
木村 ええ ・ ・ ・ でも ・ ・ ・ ちゃんとしても、結局こうなったかもしれないじゃないですか  
田中 そう？  
木村 ・ ・ ・ だって、  
田中 やっぱ、もう、早く、やめて、ばーっと、海とか行こうかな  
木村 田中さん、  
田中 2人も暗い顔してるのやめた方がいいよ  
佐藤 でも  
田中 だって、私たちがいちばん悩んでるのって、おかしいでしょ  
木村 まあ  
田中 だから、やーめた  
木村 えー  
田中 ね  
木村 夜勤どうするんですかー  
田中 大丈夫よ、佐藤さんだって、ちゃんとしてきたんだし、木村君が夜勤に入って、派遣も、ち  
木村 やんと募集かけて、2人で、大丈夫でしょ  
佐藤 えー  
田中 私は、まだまだ、  
佐藤 大丈夫でしょー  
田中 そんな  
木村 大丈夫だって、  
田中 あ、そうだ、昨日山下さんが言ってた、なんか、書類、読んでないですね  
木村 え、なんですか  
佐藤 昨日、山下さんが、置いていったんです  
木村 へー  
田中 ああ、それだ  
木村 あ、これ、  
田中 開けてみて  
木村 はい、えー ・ ・ ・ (中を見る)  
田中 え、なにに、なんて書いてるの、  
木村 あー、えー、要約すると、こういうことですね ・ ・ ・  
田中 今月いっぱい、この施設は閉館になる、ということですかね  
佐藤 え、  
木村 あ、でもあの、心配しないで、丸ごと中身、市内の施設に、移転するみたい、解雇じゃない  
田中 っつて  
木村 あー、まあ、今まで、よく、もったよね  
木村 ほんとですね

田中 辞める後押しには、なるかなー、

木村 ・ ・ ・  
佐藤 田中さん、やっぱり辞めちゃうんですか？

田中 ・ ・ ・  
佐藤 せっかく、

田中 いやだけどさ、そりゃあ、せっかく、その、仲良くはなったんだし、でも、  
佐藤 まだ、次の施設で、みんな、もつとちゃんと働けるかもしれないじゃないですか  
田中 ・ ・ ・

佐藤 山下さんも、きつと、

田中 佐藤さんさ、なんでもそうやって善良に考えて、あの人を受け入れようとする必要あるの？  
木村 (制して) 田中さん、  
田中 ・ ・ ・  
佐藤 ・ ・ ・

問

田中 私ね、離婚した、って言ったんじゃん、浮気して  
木村 はい

田中 あれね、浮気したの向こうなの、最初  
佐藤 え、

田中 結婚してから同棲だったから、私も  
木村 同棲して、すぐだったかな、浮気してるのがわかって  
田中 で、別れさせたんだけどね、しばらくしてまた、浮気してるな、って

木村 そういうのって、なんでわかるんですか？ 探偵？  
田中 勘？ 女の  
木村 うわ、こわ

田中 わかつるって、(佐藤に) ねえ

佐藤 いやー、私はー、騙されそうです  
田中 そういううちは、大丈夫なんだって

田中 してたら、わかるから、ほんとに  
木村 こわー

田中 そんなもんだって

佐藤 でまた浮気してるな、って思ったから、じゃあ今度は、こつちも浮気仕返してやろう、って  
田中 ・ ・ ・どうなったんですか？

佐藤 まあ、それが、お互いにばれたとき、なんか、思ったよりも、なんだろ、普通に、じゃあ、  
田中 別れよつか、つてなった、かな

木村 もつと、怒られたり、止めてくれると思っただけどね、なんか、もう、好きじゃなかった  
田中 みたい、もう、その時点で、お互いに  
木村 うん

田中 うん

佐藤 ・ ・ ・なんで、そんな話をしてくれたんですか、私たちに  
田中 えー、だつてなんか、いやじゃん、こー、なくなるわけだし、みんなばらばらになってから、  
佐藤 私このまま悪い女だつて思われたままだったら

田中 そんなこと、思つてませんつて  
木村 うそー

佐藤 ほんとですよー  
木村 ・ ・ ・え？

田中 ま、すつきりしたし、

木村 ああ、でも、なんか、やっぱり、そういうのって、人に話した方がいいでしょ  
田中 え？

木村 だってほら、なんか、こないだ、言ってたじゃないですか  
そういうものは、自分で見つけるものだ、って

田中 ああ、うん  
みんなで、見つけるものだと思いますよ、そういうの・・・いや、みんなですって言うか、人  
との、その、つながりとかの中に、見つけるものだと思いますよ、そういうの  
そうかもね、

木村 もっと、なんか、相談とか、できたじゃないですか  
・・・うん、

田中 演劇もそうです、そういうの、一人じゃなくて、誰かと話し合って、みんなで考えて、もっ  
とたくさんの人に知ってもらう、そういう場があるべきなんですよ

木村 誰かに発信して、誰かが受け取って、どこかで帰って来る、そういうつながりが、きっと、  
生きがいとかに、つながっていくんじゃないですか

田中 だって、そういう、悩みとか抱えてるのって、田中さんみたいに、そういう人って、きっと  
一人じゃないですもん、きっと他にもいますよ、たくさん  
だから、こう、わかんないですけど、僕も

うん、

木村 誰かと、互いを確認できる場所が、もっと、あったらいいな、って、思います

田中 そうだね・・・

佐藤 ・・・・あの、木村さん、プロポーズですか？

木村 ええ？

田中 え、そうなの？

木村 違いますから、こんな、ことが、起こらないようにするために！

田中 ・・・・こういうことが起こらないようにするために、誰かと話した方がいいんじゃないで  
すか、って、

田中 うん、そうだね

木村 関係ない人でも、やっぱり、話した方が、よかったんじゃないですか、一人で考えて、一人  
で行動しないで

田中 (明るく) 確かに、馬鹿なことしたよな！

木村 ・・・・

田中 うん、だから、ここは、辞める、私は

木村 ・・・・はい

田中 あー、私もやろつかない、演劇

木村 えー、なにするんですか、

田中 わかんないけど

木村 アングラ？

田中 はあ？ なにそれ？

木村 いやいや

田中 えー、絶対バカにしてるよ、この顔は

木村 してませんって、なんかすごいんですよ

佐藤 どんなお芝居なんですか？

木村 お芝居というか、なんか、みんなムキムキで

佐藤 えー

田中 はあ？ なにそれ

木村 ほんとですって、女も子供も、みんなムキムキなんですって

田中 私に言ってるの？

木村 えー、っと

山下、登場

山下

おつかれさまー

佐藤 ……お疲れ様です

田中 お疲れさまです

木村 ……

山下 昨日のあれ読んだ？

田中 ……はい

木村 ……はい

佐藤 ……はい、あの、なくなるんですか、ここ

山下 ああ、そうみたいだね

佐藤 そうですか…

木村 ……そうみたいって、言うのは？

山下 そういう、命令だから

田中 ……

木村 ……

佐藤 ……

山下 ああ、でもなんか、利用者さんも君たちも僕も、そっくりそのまま、近くの施設に動くだけ

田中 みたいだから、二、三日中に、大丈夫だよ

山下 ……あの、私、やめようと思います、ここ

田中 ああ、そう

田中 お世話になりました

山下 そう

木村 ……行ってきたんですか？ あの、

山下 え？ ああ、お葬式？

木村 はい

山下 だから、そういうの、わかんないって言ったじゃん

木村 なにも、思わないんですか

山下 だってさ、ああいうの、生きてる人のためにするもんでしょ、宗教って、死んでから突然思

い出したように、神様信じ始める人たちさ、すごい気持ち悪いんだよね

木村 じゃあ、ここで、ここににいる人に、謝ってください

山下 謝る？

田中 木村君、もういいよ

木村 ……、辛くないですか？

田中 ……

佐藤 ……

木村 山下さんは、辛くないですか？

山下 ……なんで？ 俺が？ 大丈夫だけど？

木村 ……なんでこんなことになったか考えました？

山下 わかんないよ

木村 ……なんで、川口さんが亡くなったのかとか、責任とか、感じませんか？

佐藤 すみません、あの、

山下 ……

木村 ……

佐藤 すみません

山下 ……佐藤さんが謝ることじゃないでしょう

木村 ……じゃあ、誰が謝るんですか

山下 ……

木村 ……じゃあ、誰が、謝ることなんですか？

山下 さあ



木村 あんたが、なにも、しないから！

山下 なに、謝ったら、なんか変わるの？

木村 なんて佐藤さんが、田中さんが、なら、この人たちに謝れ

田中 木村君もういいから！

木村 よくないだろ！ なんてこいつが、こんな顔して、平気な顔して、へらへら笑ってるんだよ！

山下 申し訳なさそうにしたら何か変わるの？

木村 お前が！ あんたが！ 殺したんだ！

田中 ・・・・ダメでしょ・・・？

木村 ・・・・やめます、僕も、

山下 ああ、そう

間

山下 まあ、どのみちなくなるからね、ここ

間

山下 佐藤さんは、どうする？

佐藤 あの、

木村 仕事、交代しなきゃいけないんで、着替えてきます

木村、退場

佐藤 山下さん

山下 ？ なに？

佐藤 あの、止めないんですか

山下 なにを？ 誰を？

佐藤 あの、田中さんも、木村さんも

田中 佐藤さん、いいよ

佐藤 でも、

山下 なんで止めるの？

佐藤 ・・・・

間

田中 違うんだよ、そもそも、価値観が、この人に何言っても、無駄だよ、分かり合える人と、分

山下 かり合えない人がいるんだよ、私は無理、この人とはもう、絶対無理だよ

田中 えー、なんかそれ、傷つくな！

田中 ・・・・

佐藤、押さえきれなくなり、退場

木村、入れ違いで、登場

山下 ねえ、知ってる？ あと20年したら、今ね、世界にある仕事のうちの、50パーセントは

なくなるらしいよ

木村 なんか、全部コンピュータに取って代われちゃって、歩く電卓なんて、必要なくなると

思うよ、ましてや、歩けない電卓なんて、いらなくなると思うよ

木村 それは、ただの電卓です  
山下 そうだね、電卓がいるような仕事は真っ先にさ、機械で自動化されてね、なくなると思うん

木村 だよ、機械が僕らの仕事を取って代わって行った先に、本当に僕たちにはかできない仕事って何だろうね  
え？ いや、あの

山下、木村の足を折る  
木村、絶叫  
山下、平常心  
田中、放心

山下 痛い？ 大丈夫？

(泣き叫んでいる木村に)

折れた？ 折れた？

(絶叫している)

木村 うるさいなあ、黙れ、黙れ！

佐藤、悲鳴を聞いて、登場

山下、木村を放る

佐藤、それを見て、木村を介抱しようとする

山下 じゃあ、田中さん、スイカ割り、しよっか

佐藤、田中、沈黙

山下 あー、じゃあ、田中さんが、スイカ、割るから、

佐藤さん、田中さんに目隠ししてあげて

かたくなに、拒もうとする佐藤

山下、佐藤にじり寄る

田中 いいから、いいから、佐藤さん、いいから、言うとおりにして、大丈夫だから  
佐藤 でも、  
田中 いいから！

木村、山下を止めようと、必死に足に縋りつく

山下 ねー、気持ち悪いって、離れてよ、気持ち悪いってば

(やめてください、やめろ、などといっているが、言語になっていない)

田中 (佐藤だけに聞えるように) 大丈夫だから、すぐ逃げて、佐藤さんだけでも逃げてね  
佐藤 (すみません、すみませんなどといっている)

山下、その間、木村を足蹴にしている

山下 ねー、離れてよー

舞台、徐々に暗転してゆく

山下、木村の折れた足を踏む

木村の悲鳴が暗闇にこだまする

静かになる

暗闇に声

山下

じゃあ、佐藤さん、田中さんに右とか、左とか、言ってあげて  
・・・えー、なんか言ってあげないと、田中さん動けないじゃん  
右とか、左とか  
早く、  
・・・  
言わないならいいや

明るくなった瞬間

スイカになってしまった田中の頭部を叩き割る山下

スイカ、木っ端微塵に碎ける

山下

スイカでしょ？

佐藤

今、僕たちが協力して割ったのは、スイカでしょ

山下

今、僕たちが協力して割ったのは、スイカでしょ

佐藤

今、僕たちが協力して割ったのは、スイカでしょ

山下

俺ね、すごいと思うんだ、君たちってさ、やり返さないでしょ

佐藤

ねえ、なんでやり返さないの？

山下

なんで、そんなにやり返しちゃういけないって思ってるのかなあ、って

佐藤

気持ち悪くて、ほんとに気持ち悪くて

山下

お前らはさ、自殺とか言って、好きなどころで、死ねていいよな

佐藤

喚くだけで何にもしてくれない、それがお前たちだ

山下

俺も神の下で死にたかった

佐藤

なんだよ、聖地じゃなくても、たくさん殺せば救済されるって

山下

お前が、お前らが、俺たちの神を殺したんだ

佐藤

ね、いいよね、木村君は劇場で死ねるんだから、ここで、死ねるんだから、本望でしょ

山下

木村の呻き声

木村

山下荷物から目覚まし時計を取り出す

山下

はい、これ、もって

木村

いやだ、いやだ

山下

大丈夫だよ、ただの目覚まし時計だよ、

木村

違う、違う、これは、目覚まし時計じゃない、

山下

目覚まし時計だよ、大丈夫だから、

木村

はい、立って、

木村

いやだ、いやだ、

山下

立って、

木村 目覚まし時計じゃない、  
山下 立て、立て！

木村、黙る

山下、木村の傍に、本を放る

そして、新しい目覚まし時計を取り出して佐藤に渡そうとする

佐藤、受け取らない

間

佐藤

こんなことで、私たちは救われない

僕たちはさ、追い詰められてこういうことをするんだけど、僕たちにこういうのをくれて、  
応援してくれる人たちってさ、全然追い詰められてない人たちなんだよね

じゃあさ、これはさ、誰が、誰に向けた、犯行声明なんだろうね

山下、佐藤の傍に、目覚まし時計を置いて、木村に近づく

木村の傍に投げた本を取り上げて、本を読む

山下

ええ、お発ちなさいとも

．．．．．まったくあなたという人は、根が実直な、いい人のようじゃあるけれど、その  
くせなんだかこう、不思議なところのある人だなあ

現に、あなたご亭主といっしょにここへ見えると、それまでせっせと働いて、その辺をご  
そごそやって、何かこう仕事らしいことをしていた連中が、忽ちみんな仕事をうっちゃらか  
して、まるひと夏というもの、ご主人の痛風だの、あなたのことだので、無我夢中になっ  
てしまうんだからなあ

あなたがた夫婦のぐうたらな暮しぶりが、みんなにうつちまったんだからなあ  
僕はすっかりのぼせあがって、まる一ト月というもの、何ひとつやらなかった

そのあいだに、病人は、うじやうじや出てくる

僕の森や苗木の林じゃ、百姓が牛や馬を放し飼いにする

．．．．．まあ、こんな具合に、あなたがた夫婦という人は、どこへ行っても、その暮  
しをめちゃめちゃにするんですねえ

．．．．．いや、もちろんこれは冗談  
だが、しかし、．．．．．どうも不思議だなあ

もしこの上、あなたがたがここに居坐っていたら、それこそ何もかも、ごっそり行かれてし  
まうことでしょうねえ

僕の身も破滅だろうし、あなただっても、どうせろくなことはないでしょうよ  
さ、さっさとお発ちなさい

もう芝居は沢山！

間

山下

どうも不思議だ

．．．．．せっかくこうして知り合いになったものが、いち夜明ければもう．．．．．  
二度と会うこともない赤の他人だなんて

これが人生というものかもしれない

．．．．．誰もいないうちに、またワーニヤ伯父さんが花束をかかえてはいつてこない  
ちに、お願いですからいっぺんだけ．．．．．キスをさせてください

．．．．．お別れのしるしに．．．．．いいでしょう？ ああ、これで．．．．．もう  
いい

早く発ってください

馬車の用意ができたのなら、さあ早く発ってください

佐藤 山下さん、  
山下 安息を約束してくれる神様と、僕たちが普段信じてる神様と、熱心に信じてる人を幸せにしてくれる神様と、熱心に信じすぎちゃって命まで捧げる人たちが信じてる神様がさ、本当に一緒のものだと思う？ わかんないけどさ、でも、仕方がないでしょう

木村、立って、歩き出す

木村 さようなら

木村 ……赦してください  
……二度とお目にかかる時はありますまい  
山下 さよなら、ワーニヤさん

山下、退場

佐藤 じゃあ、ワーニヤ伯父さん、勘定書から始めましょうね

すつかり、ほつたらかしになつてるわ

今日も勘定書を取りに来た人があるのよ

じゃ書いてくださいね

あなたはそつち、わたしはこつちを書くわ

……

木村 一つ……ええと……

ええと、未払金の残額、2ルーブリ75也と……

佐藤 この次は、いつお目にかかれて？

まあ、来年の夏でしょうな

この冬は、まずもって見込みがなさそうです

……もつとも、何かあったらお知らせ願いますよ即刻、駆けつけますからね

……

ええと、3月20日、しょうじんゆ精進油2貫500目

……9月11日、ひきわまたも精進油2貫500目

……それからひきわ碾割りソバがと……

間

佐藤 お発ちになつたわ……

木村 ええと、締めて……85ルーブリと……25コペイカ也……

ソーニヤも腰かけて書く

木村 ああ、神さま、どうぞお赦しを……

木村、机の上で、倒れる

木村 ソーニヤ、わたしはつらい

わたしのこのつらさがわかってくれたらなあ！

木村、絶命する

佐藤、木村の亡骸を

佐藤

でも、仕方がないわ、生きていかなければ！  
ね、ワーニヤ伯父さん、生きていきましようよ

長い、はてしないその日その日を、いつ明けるとも知れない夜また夜を、じつと生き通していきましようね

運命がわたしたちにくだす試みを、辛抱ぶよく、じつとこらえて行きましようね  
今のうちも、やがて年をとってからでも、片時も休まずに、人のために働きましようね

そして、やがてその時が来たら、素直に死んで行きましようね

あの世へ行ったら、どんなに私たちが苦しかったか、どんなに涙を流したか、どんなにつらい一生を送って来たか、それを残らず申上げましようね

すると神さまは、まあ気の毒に、と思ってください

その時こそ伯父さん、ねえ伯父さん、あなたにも私にも、明るい、すばらしい、なんとも言えない生活がひらけて、まあ嬉しい！ と、思わず声をあげるのよ

そして現在の不仕合せな暮しを、なつかしく、ほほえましく振返って、私たちほっと息がつけるんだわ

わたし、ほんとにそう思うの、伯父さん

心底から、燃えるように、焼けつくように、私そう思うの  
………ほっと息がつけるんだわ！

ほっと息がつけるんだわ！ その時、わたしたちの耳には、神さまの御使たちの声がひびいて、空一面きらきらしたダイヤモンドでいっぱいになる

そして私たちの見ている前で、この世の中の悪いものがみんな、私たちの悩みも、苦しみも、残らずみんな世界じゅうに満ちひろがる神さまの大きなお慈悲のなかに、呑みこまれてしま  
うの

そこでやっと、私たちの生活は、まるでお母さまがやさしく撫でてくださるような、静かな、うっとりするような、ほんとに楽しいものになるのだわ

私そう思うの、どうしてもそう思うの

………お気の毒なワーニヤ伯父さん、いけないわ、泣いてらっしゃるのね

………あなたは一生涯、嬉しいことも楽しいことも、ついぞ知らずにいらしたのねえ  
でも、もう少しよ、ワーニヤ伯父さん、もう暫くの辛抱よ

………やがて、息がつけるんだわ  
………ほっと息がつけるんだわ！

ほっと息がつけるんだわ

床に散らかるカレンダーの数字たち

3月20日、9月11日、11月13日

遠くから、電車が近づいてくる

爆音

ガタンゴトン、ガタンゴトン

ガタンゴトン、ガ・・カッタアウト

突然の静寂

パチンと切れる照明

静かに、幕

明かりがつくと、佐藤もそこに倒れている  
起き上がる

カーテンコール

悲鳴を上げているのは誰だろう

全員、礼

幕